

【第 42 回 世界新体操選手権大会】

【団体総合】

8 月 15 日、団体総合が行われ、日本は 2 種目を通して今シーズン最もまとまりのある演技を披露し、2028 年ロサンゼルスオリンピックの出場権を獲得するとともに、昨年に続く世界選手権でのメダル獲得を果たした。

今大会は、団体総合上位 3 か国にロサンゼルスオリンピックの出場枠が与えられる重要な大会であり、日本チームにとって出場権獲得は大きな目標の一つであった。一方で、試合を迎えるにあたりチームで一貫して確認してきたことは、順位や得点を追うのではなく、これまで積み重ねてきた自分たちの演技にこだわり、一つひとつを正しく、力強く、自信を持ってやり切ることであった。

日本チームは C グループ 12 番目、全体でも最後から 3 番目という試技順で登場した。すでに多くの国が演技を終え、順位や得点が見える状況ではあったが、周囲の結果に左右されることなく、自分たちがやるべきことに集中してフロアに立った。

フープ・クラブ、ボールともに細かな取りこぼしはあったものの、大きなミスにつなげることなく、5 人が最後まで互いを信じ、粘り強く演技をつないだ。今シーズンを通して何度も課題と向き合い、試合を重ねながら磨き続けてきた 2 種目を、この世界選手権という最も重要な舞台で発揮できたことが、オリンピック出場権、そして 2 大会連続となる世界選手権でのメダル獲得という結果につながった。

大きな目標を前にしても、最後に必要なのは自分たちのやるべきことを信じ、それをやり切ることである。選手たちがこの大舞台でそれを体現し、自らの力で結果をつかみ取ることができた団体総合となった。

《フープ・クラブ》

合計 28.550 点 (DB5.6/DA7.7/A7.95/E7.3)

直前練習では緊張から選手間にばらつきが見られ、ミスが続くなど、決して万全な状態で本番を迎えたわけではなかった。しかし、試合前に改めてチームで話し合い、一人ひとりがやるべきことを確認したことで徐々に落ち着きを取り戻し、本番では選手たち自身で冷静に試合を運ぶことができた。

演技では、交換の受け 2 か所で追加価値を取りきることができなかったものの、それ以外の技については、投げに乱れが生じた場面でもそれぞれが素早く対応し、落下を防ぎながら確実に演技をつないでいくことができた。

特に、これまで磨いてきたフェットターンでは、5 人の動きが揃った高い同時性を見せ、会場からも大きな歓声を受けた。後半にかけて次々と展開される技においても最後までエネルギーを落とすことなく、今シーズンで最もまとまりのある演技を踊り切ることができた。

日本の直前にはフランスの演技に対する大きな応援で会場が盛り上がっていたが、日本の演技が始まると会場は一転して静かな雰囲気となった。その中で日本の応援団からの声援が会場によく響き、選手たちの背中を大きく押してくれた。演技が進むにつれて、フェットターンをはじめとする技の数々に自然と歓声が起こり、最後には大きな声援を受けて演技を終えることができた。

日本チームが今シーズン大切にしてきた 5 人の「揃える力」と、力強く展開していく作品の魅力を、世界選手権という舞台で十分に表現することができた 1 本となった。

出場選手：田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、田邊観世埜

《ボール》

合計 28.150 点 (DB5.7/DA7.0/A7.95/E7.5)

今シーズンは、1 種目目で良い演技をした後、気持ちを切り替えて 2 種目目に臨むことに苦戦する場面があったため、フープ・クラブ終了後の試合運びも重要なポイントであった。しかし、選手たちは演技終了後すぐに気持ちを切り替え、集中力を緩めることなく、次の演技に向けた準備を進めることができた。

事前にドーム型の会場を想定した練習を日本でも重ねてきたものの、現地での公式練習や直前練習では投げ受けに乱れが見られ、最後まで不安要素が残る中で本番を迎えた。そのため、「きちんと手具の下に入り、確実に取りきってから次の動作へ移る」という基本を改めて確認し、目の前の一つひとつの技に集中して演技に入った。

本番では、連係で 1 名、リスクで 1 名が両手受けとなり、受けの追加価値を獲得できない箇所があったものの、それ以外の技については多少の移動を伴いながらも、最後まで果敢に挑戦することができた。特に交換では、投げに乱れが生じた場面でも選手それぞれが状況を瞬時に判断してカバーし、落下を防ぎながら演技をつないだ。

一部のバランスにばらつきが見られたことで DB の得点は伸び悩んだものの、フープ・クラブに続き、ボールでも今シーズンで最もまとまりのある演技を披露することができた。

何より、1 種目目を良い演技で終えた後も気持ちを緩めることなく、2 種目目まで集中力を維持し、チームとして最後まで自分たちの演技をやり切ることができた点は大きな成長であ

る。これまで課題としてきた部分を、世界選手権という最も重要な舞台で乗り越えることができた。

出場選手：田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、眞鍋凜

合計 56.700 点 2 位・銀メダル

2028 年ロサンゼルスオリンピック出場権獲得

【団体総合 総括】

パリオリンピックの出場権を逃した際には、選手たちが大きな悔しさを味わう姿を目の前で見てきた。その経験をした選手 2 名が現在のチームにも残り、再びオリンピックの舞台を目指して、新たなメンバーとともに強化を積み重ねてきた。

悔しさを経験した選手がその思いを次のチームへつなぎ、新たなメンバーがその思いを受け取り、全員で結果へとつなげることができた。今大会では、演技を終えた選手たちが喜びの涙を流す姿を見ることができ、これまで支えてくださった多くの皆様への感謝を一つの結果として形にすることができたことに、心から安堵するとともに、大きな喜びを感じている。

今回の日本チームは、個々の能力や国際経験だけを見れば、決して世界の上位国に対して優位な状況にあったわけではない。他国にはオリンピックを経験した選手も多くいる中、日本にはオリンピック出場経験のある選手は一人もおらず、世界最高峰の舞台で勝ち切るための経験値という点においても、大きな挑戦であった。

それでも選手たちは、最後まで挑戦することを諦めなかった。どのような状況においても「自分たちの演技をやり切る」という強い思いを持ち、日々の練習に向き合い続けてきた。そして世界選手権という最も重要な舞台で、5 人が互いを信じ、積み重ねてきたものを結果へとつなげることができた。

しかし、この結果は、今大会に出場した選手、スタッフだけの力で得られたものではない。

日々長時間にわたり選手と向き合い、作品と技術を磨き続けてきたコーチ陣、選手たちを日頃から育て、代表活動へ送り出し、温かく見守ってくださっている所属の先生方、そして、選手が万全な状態で練習や試合に臨めるよう、専門的な知見と多方面からのサポートによって支えてくださった新体操医科学プロジェクトチームの皆様。さらに、選手たちが力を出し切った時に、その演技が国際舞台で正しく評価され、世界と勝負できるものとなるよう、

国際的な視点、審判の視点から多くの助言をいただいた審判の先生方。その一つひとつのお力添えが、今回の結果につながっている。

そして、長年にわたり日本新体操の発展と強化に尽力され、その礎を築き、次の世代へとつないでくださった諸先生方、オフィシャルサプライヤーの皆様をはじめ、日本代表の強化活動を支えてくださる皆様、国内外からいつも温かいご声援を送ってくださる多くの皆様にも、心より感謝申し上げたい。

日本新体操には、長い歴史と積み重ねがある。歴代の代表選手、指導者、審判をはじめ、多くの関係者の皆様が世界に挑戦し続ける中で培ってきた経験や知見、築いてくださった国際的な信頼やつながりが、世代を越えて現在の日本代表へと確実に受け継がれている。

だからこそ、今回獲得したロサンゼルスオリンピックの出場枠は、現在のチームだけで勝ち取ったものではない。これまで日本新体操を築き、支え、次の世代へとつないでくださったすべての皆様とともに、日本新体操全体で勝ち取った出場権であると感じている。

そして、オリンピック出場権の獲得はゴールではなく、新たなスタートでもある。

日本新体操は、これまでオリンピックでメダルを獲得したことがない。今回、世界選手権で2年連続となるメダルを獲得し、ロサンゼルスへの道を切り拓くことができたからこそ、次に目指すべきものは明確である。

2028年ロサンゼルスオリンピックで、日本新体操史上初となるオリンピックメダルを獲得すること。

今回の結果に満足することなく、世界の頂点で戦うために何が必要なのかを改めて見つめ、選手一人ひとりの力、チームとしての力、そして日本としての総合力をさらに高めていかなければならない。

今回いただいた多くのお力添えへの感謝を忘れず、さらなる高みを目指し、これからも選手、スタッフ、そして日本新体操に関わるすべての皆様とともに、日本新体操全体でロサンゼルスオリンピックでのメダル獲得に向けた強化に取り組んでいきたい。